

HARDY

ALNWICK | ENGLAND

Vol.

02

HARDY PERFECT



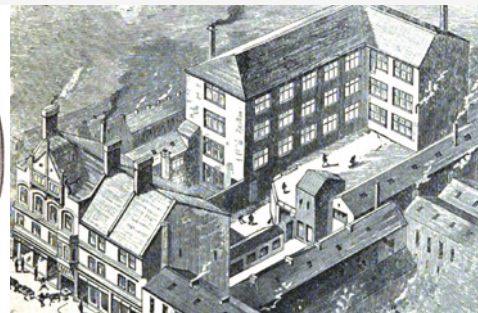
HARDY
ALNWICK | ENGLAND

HARDY PERFECT

ハーディー・パーフェクト



ウィリアム



アーニック所在のハーディー社工場 [1899]



ジョン・ジェームズ("J.J.")

世界各地であまたのフライリールが愛用される中、永い年月の試練に耐え、唯一無二のリールとして圧倒的存在感を放っているのが、ハーディー・パーフェクトリール (Hardy's Perfect reel)。「完璧」との名に恥じめ高い完成度と耐久性、そして何より、数え切れない機構改良やモデルチェンジに取り組んできた進化の歴史が、今もなおベテランアングラーたちの羨望を掻き立ててやまない。今回は、19世紀末から製造が続くフライリールの超ロングセラーについて、その来歴をじっくりと紐解いてみたい。



中列中央がフォースター、その右がウィリアム



ハーディー社工場リール製造工程の様相 [1899]

パーフェクトの歴史はハーディー兄弟商会 (Hardy Brothers) の歴史そのものと云っても過言ではなからう。イングランド北部アーニック (Alnwick) の地に代々暮らすハーディー家、その長兄ウィリアム (William Hardy [1853-1917]) が父親の死を契機に1872年、銃砲製造業を立ち上げた。すると翌73年に次男のジョン・ジェームズ (John James Hardy [1854-1932]) が参画して、ハーディー兄弟商会の輝かしい歴史が幕を開ける。

堅実なウィリアムは主に商会の経営や取引実務を一手にとり仕切り、他方ジョン・ジェームズは生来の積極性を活かして工場の運営監督や宣伝広告を担当した。1874年から釣り具の製造販売も開始した同商会の運営は、従来この二人の兄弟についてばかり語られがちだが、当時、製品の開発・設計を担っていたもう一人の重要な存在を忘れてはならない。それが、ハーディー家の三男坊、フォースター (Forster Hardy [1856-1929]) である。

フォスターは永く船舶エンジニアとして働いた後、1885年頃、ハーディー兄弟商会に参加した。前職で培った設計技術の腕を活かし、釣具について幾つもの特許を取得するのだが、革新的な内部機構を備えるパーフェクトを世に送り出したことこそ、彼の最大の功績である。だが、忘れずに記しておかねばならない事実がある。フォスターもまたハーディー家の伝統に漏れず、無類の釣り好きであったのだ。事実、フィッシングガゼット誌の1890年6月14日号は、彼を「鬼の釣り師」(the "Demon" fisherman)と評している程である。

さて、パーフェクトの解説に入る前に、何故その開発が求められたのか、歴史的意義を理解することが重要だ。そこで、まずは当時の一般的なフライリールの姿について説明しておこう。

そもそも、英国釣魚史上に初めて登場するリールは、「ウインチ」(winch)と呼ばれる構造をとっていた。スプールの中心を貫通する回転軸の両端を2枚のプレートで支え(両軸受け構造)、一端の伸びた回転軸をクランク状に折り曲げてハンドルとしていたのである。ただ、クランクハンドルはラインに絡み易かったため、後にリールフレームと同型のハンドルプレートに取って代わられる。当初、フライフィッシングにおけるリールの役割には専らライン収納しか求められていなかったため、19世紀末に至るまでずっとこの構造が墨守されていくことになる。

だが、この両軸受け構造をとる限り、プレートが3枚——軸受け用2枚とハンドルプレート1枚——も必要となる。当時のリール素材には真鍮(brass)などが用いられていたが、分厚い真鍮製のプレートはリールを著しく重くしてしまう。リールの軽量化を如何に実現するかが、19世紀末のリールメーカーにとって喫緊の課題となっていたのである。



ハーディー社のクランクハンドル付きブラスウインチ [circa 1880]

そこでリール設計者たるフォスター・ハーディーは考えた。「真鍮は柔らかい素材であるためプレートを薄く造るのには無理がある。ならばプレートの枚数を減らせば軽量化できるのではないか?」当時、すでにコースフィッシング(注：英国式餌釣り)の世界では片軸受けリール (centre-pin reel) が広く普及していたが、これと同じ構造をフライリールに持ち込んだところで、気位の高いフライフィッシャーが反発するのは火を見るよりも明らか。「ならば、まったく新しい軸受け構造を創り上げよう」と意気込むフォスターの考案したのが、謂わば「中軸受け構造」とも呼ぶべきスタイルである。



ハーディー社のハンドルプレート付きウインチ (Hercules [1890s])

これは、スプールとハンドルプレートとの間に挟まれた軸受けプレート1枚だけで回転軸を支えようというアイデアである。結果、ハンドル反対側の軸受けプレートは不要となるのだが、ブレの無い回転を確保するためには、スプールとハンドルプレートを、軸受けプレートを挟んだ状態で圧着させなければならない。すると、挟まれた軸受けプレートには摩擦を生じ、スプールのスムーズな回転が阻害されてしまうのだ。フォスターはこの問題を、軸受けプレートの外面にボールベアリングとそれが走る軌道輪を設けて、圧着されたハンドルプレートの円滑性を確保する方法により解決した。今日、パーフェクトの優れた点として、ボールベアリング導入による円滑なハンドル回転を挙げる向きが多いが、同機構はそれ自体が目的ではなく、中軸受け構造を実現するためにやむなく導入した手段であったと理解すべきだろう。

フォスターが1889年に特許を取得した上記の内部機構を実用化すべく、ハーディー兄弟商会は3年の開発期間を経て、遂に新型軽量フライリールの量産に成功した。それが、1891年のカタログに初めて掲載された所謂「オリジナル・パーフェクト」(Original Perfect)である。径2-1/4インチのトラウト用から5-1/4インチのサーモン用まで、実に13種ものサイズが用意された。

未だ真鍮を躯体に用い、フレーム構造は完成されていないが、基本的な構造については今日のパーフェクトとなんら変わらぬ姿が実現されている。

細部について説明すると、軽量化のおかげで可能となったスプールの大径化や、ライン乾燥のためスプールに穿たれた多数の換気孔、スプール脱落防止用の左締めネジを外してスプールとハンドルプレートを逆回転させるだけで済む簡易なスプール着脱、といったさまざまな工夫が凝らされているが、中でも重要なのがラチェット機構である。これは、リム上に設けられたネジによってラチェットの効きの強弱を調整するものだが、オリジナル・パーフェクトにおいてリール史上初めて実用化された機能である。



オリジナル・パーフェクト (ハンドルプレート面)



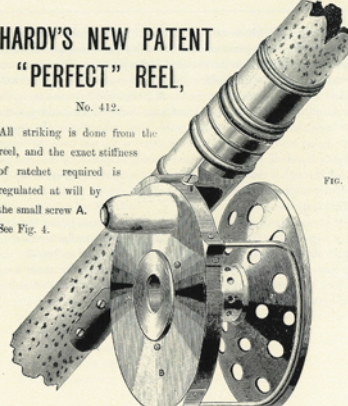
オリジナル・パーフェクト (スプール面)

1893年の同商会カタログに掲載されたFIG.4.をご覧ください。リールの回転軸に設けられた歯車に、小さな鎌(やじり)型の爪(図中B:ratchet)がチェックを掛け、その爪の動きを細長い馬蹄形をしたバネ(図中C:spring)が制御する仕組みになっている。スプールの正転時にはバネの上半分が常に一定の圧力を掛けるのだが、逆転時には調節ネジ(図中A)によって圧を調整された下半分のバネで、暴れる獲物へのラインプレッシャーを加減することができるのだ。

1891年に刊行された釣魚雑誌をみると、オリジナル・パーフェクトについてフィールド誌は『軽量かつ優れたデザインを備えるこのリールは、新しいコンセプトに基づいてしっかりと製造されたものである』と高く評価し、ブリティッシュスポーツマン誌も『これまで世に送り出されたリールの中で最も軽量で最もシンプル、かつ最も完璧な製品だ』と激賞しているところには、当時、このフライリールが英国のフライフィッシャーたちから歓呼を持って迎えられた様子が窺える。

HARDY'S NEW PATENT "PERFECT" REEL,
No. 412.

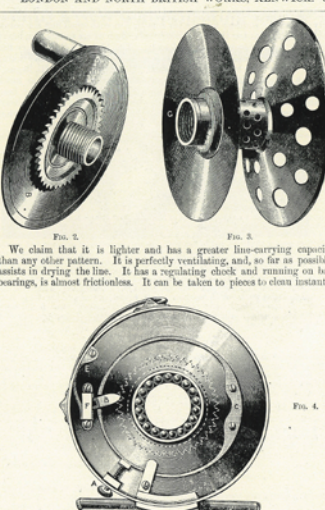
All striking is done from the reel, and the exact stiffness of ratchet required is regulated at will by the small screw A. See Fig. 4.



We have pleasure in introducing our new "Perfect" Reel. It has been made the subject-matter for two patents, and has occupied some three years in perfecting, having made and practically tested something like twelve varieties of construction before we arrived at the above illustration, which we fearlessly claim to be the best reel made anywhere, and this we do with a full knowledge of all reels manufactured on either side of the Atlantic.

| No. | Size | Price |
|------------|------|----------|
| No. 413-24 | in. | £ 1 5 0 |
| " 414-24 | in. | " 1 5 0 |
| " 415-24 | in. | " 1 7 6 |
| " 416-3 | in. | " 1 10 0 |
| " 417-34 | in. | " 1 12 6 |
| " 418-34 | in. | " 1 15 0 |
| " 419-34 | in. | " 1 17 6 |

LONDON AND NORTH BRITISH WORKS, ALNWICK. 55



We claim that it is lighter and has a greater line-carrying capacity than any other pattern. It is perfectly ventilating, and, so far as possible, assists in drying the line. It has a regulating click and running on ball bearings, is almost frictionless. It can be taken to pieces to clean instantly without any mechanical knowledge or tools. The workmanship is of a higher class than has ever before been introduced into reels, everything being most carefully attended to; all springs, tongues, bridges, &c.,

as IN ORDERING FROM THIS LIST PLEASE QUOTE LETTER C.

ハーディー社
カタログ
[1893]より

しかしながら、ハーディー兄弟商会は決して改良の手を緩めなかった。1892年にはスプールの外縁部を完全に覆うフレームを採用して、今日のパーフェクトと同じ構造が確立された。1903年、スプールの径3-3/4以上の機体には円形のラインガードがオプションで装着できるようになった。素材についてみると、早くも1905年のカタログでは、アルミ合金製のフレームとスプールを導入した機体が紹介されており、一層の軽量化が図られた。このように、パーフェクトは20世紀に入って長足の進歩を遂げていくことになる。

では、この時代のパーフェクトリールの性能について、ジョン・ジェームズ・ハーディーが自身の著書「サーモンフィッシング」(SALMON FISHING [1907])の中で語っているので、その一節を引用してみたい。

1890年代パーフェクトの内部構造



J.J.ハーディー(SALMON FISHING [1907])

『真鍮や洋銀 (German silver) を用いた旧式の重いリールは、アルミニウムを主成分とする新しい軽量合金製のリールに道を譲った。そのスタイルもまた、スプールの径が小さく巻取り速度の遅いスプールの長いタイプから、ラインの放出と巻取りに伴う労力と時間をきわめて効率化できる径が大きく軸の短いスプールを備えるタイプへと進化している。メンテナンスのために分解が容易で、ボールベアリングまで搭載しているリールは、その操作性の高さと滑らかな回転性能から大いに人気を博している。内部のチェック機構は調整可能であるべきだ。つまり、逆転時の回転を制御するラチェットの強弱が自在に操作できなければならないのだが、それが正転時にもリールの回転に負荷を掛けてしまうような過ちは避けねばならない。この制御はラインを吐き出すときにだけ必要なのだ。』

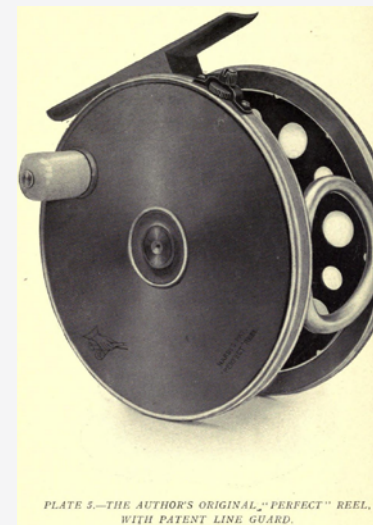


PLATE 5.—THE AUTHOR'S ORIGINAL "PERFECT" REEL, WITH PATENT LINE GUARD.

第5図: J.J.ハーディー愛用のサーモン用パーフェクト (SALMON FISHING [1907])

第5図に示すリールは、著者お気に入りの逸品で、これまで大いに役立つくれた。特許登録された「リヴォルビング・リング・ラインガード」(筆者注: ライン摩擦の溝が一箇所に集中しないよう、リングは回せるようになっている)は1903年の春に特注で取りつけてもらったものだが、シュート時にラインがリールの後ろ側に引っ掛かってしまうのを避ける効果がある。スプールに設けられた多数の換気口は、重量減には殆ど貢献しないが、主にラインを乾かすための設計である。ただし、この穴はシルクラインのコーティングに傷を与えてしまうため、今では廃止されている。

チェック機構の摩損は大きな問題である。ハンドルを一回転すると、チェックの爪は30回も歯車にぶつかることになるからだ。ハーディー社製の爪は他社製のチェックよりもずっと念入りに焼きが入れられて耐久性が高い。真に堅牢でバランスのとれたチェック機構は、つい最近完成したばかりの発明品で、それまではリールの故障など日常茶飯事であった』

もちろん、パーフェクト活躍の舞台はスコットランドのサーモンリバーばかりではなく、イングランドのチョークストリームにおいてもその高機能が遺憾なく発揮された。ここでは、19世紀末から20世紀初頭にかけて高度に発展した英国ドライフライの釣りについて簡潔に解説しておこう。

イングランド南部に広がる白亜層の随所から湧き出す泉は、徐々に合流し、やがて一本の清らかな川となって北海にそそぐ。その流れは澄み切って降雨にも濁らず、季節を通じて一定を保つ流量や水温が、水中に暮らす植物や昆虫を慈しみ育んでいる。お陰でチョークストリームが鱒たちの楽園となるのは当然であるにせよ、それは同時にフライフィッシャーたちにとってもパラダイスであることを意味していたのだ。

豊かな生物相を背景に、季節や時間帯に応じて刻々と変化する水生昆虫の羽化が、ここには確認される。そして川面に浮かぶ羽虫を、鱒がじっくり

品定めしながら一緒に流下して、最後の審判が下される。日々繰り返されるこうした食卓劇を、釣り人が自ら演じてみたいと願ったところから、この釣りは始まったのである。

まず、本物の羽虫かと思紛うばかりの精緻な毛鉤を自らの手で巻き上げ、それにパラフィンオイルを塗って水に浮くよう準備しておく。これを川上に向けて静かにキャストするのだが、追ってきた鱒が違和感を抱かぬよう、先糸にスラックをかけてドラッグを回避しなければならぬ。それでも疑いを拭いきれない鱒が毛鉤とともに流下するその刹那こそ、ドライフライマンにとって天国であり、また地獄でもあったのだ。

この釣りの理論を完成させ、全世界に向けて発信したのが「ドライフライの法皇」こと F.M. ハルフォード (Frederic Michael Halford [1844-1914]) である。彼自身パーフェクトリールの愛用者であり、ハーディー兄弟商会も 19 世紀末、同リールの



パーフェクトリールで釣る英国紳士

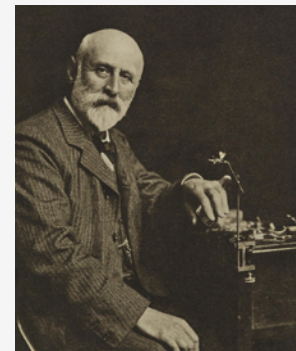


テスト川を釣るハルフォード(左)

2-5/8 インチモデルに、彼が所属した釣魚クラブの名を冠して「ホートン・ドライフライリール (Houghton dry-fly reel)」と命名したところには、ハルフォードとハーディー兄弟商会の蜜月関係が窺える。

そんな彼がドライフライロッドの選択から鱒の解剖学に至るまで、ドライフライの釣りにまつわる理論と実践論を集大成した名著、「ドライフライフィッシング その理論と実践」(DRY-FLY FISHING IN THEORY AND PRACTICE)の第四版 [1902] の中には、ドライフライフィッシング用のリールに求められる性能について説明する部分があるので、その一節を以下に引用してみたい。

『旧式のリールは、回転プレートにハンドルに着いた新型リールに取って代わられた。この新型リールには更なる改良が加えられ、スプール径を拡大する代わりにスプール幅が狭くなっている。このお陰で、釣り人はより素早くラインを回収できるため、鱒を掛けたときにラインが緩んでしまうのを恐れ



F.M. ハルフォード

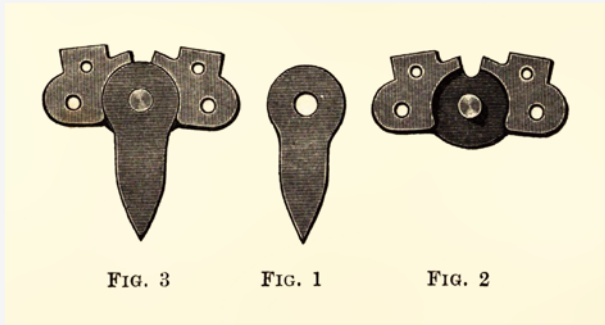
る釣り人にとっては特に朗報である。リールの内部にはチェック機構が不可欠である。サイレントチェック機構の方が良いとする人もいるが、寡聞にしてその理由を拝聴したことがない。私はむしろ昔どおり、耳障りなくらいうるさいチェック音の方が好きだ。3ポンド級の大鱒が最初のひとノシで奏でてくれる音楽は、なんとも耳に心地良い。

チェック機構について一申し

上げると、ラインが引き出される際に発揮されるチェック機構の強さというか抵抗力に、釣り具メーカーはもっと気を遣うべきである。概して、チェック機構は強過ぎる設定となっているのだ。それ故、リールにテンションを掛けながらアワセを入れる場合(これこそ唯一の正しい方法だと信じているのだが)、毛鉤がアワセ切れしてしまふケースが頻発している。もしチェックの設定が軽ければ、十分防げる話である。故マリエット氏が生前に散々試した結果明らかとなったのは、現代風の太くて重いドライフライラインで15ヤード先を釣る場合、ラインに指を掛けられない状態のまま、フライをピックアップしてバックキャストに入るまでに、リールのチェックが一回だけチッと鳴るくらいの強さが、丁度良いチェックの設定であるということだ』



テスト川



1905年パーフェクトのラチェット構造

事左様に、英国ドライフライマンは兎に角フライリールのチェック機構に拘った。当時の一般的なフライリールでは、ハルフォードが説いたアワセの問題だけでなく、大物に遁走された際に軽いスプリングでは爪の動きが歯車の高速回転についていけず、歯から浮いたままでストッパー機能を果たせない、といった問題も散見された。このため、ハーディー社はパーフェクトリールの製作上、チェック機構のあり方を何度も徹底的に見直し続けた史実が知られている。云うなれば、パーフェクトの歴史とは、チェック機構の進化の歴史そのものだったのである。

では、1897年に導入されて以降、主に鱒釣り用に開発が続けられたスプール幅の狭いモデル群(“Contracted Perfect” or “Perfect Narrow-drum”)について、20世紀におけるパーフェクトの発展過程を、主にチェック機構に着目しながら概観していこう。

まず、先に紹介した1905年に導入されたアルミ合金製の新しいパーフェクトには、従来型の細長い馬蹄形のバネを使用しつつも、上記の図が示すように、爪の基部を二つの駒が支える機構が採用された。この駒がラチェットの余分な振れを制動して、ラチェットが確実にスプール軸の歯車を捉えられるようになったのである。

続く1912年、パーフェクトのチェック機構に大きな見直しが行われた。まず、爪は従来の固定式がほぼ三角形の遊動式に変更され、その爪の上からV字型の板バネが圧力かけるスタイルへと改められた。特筆すべきは、その板バネに加圧するトング(tongue)の姿で、滑らかな曲線を描きながら調節ネジの力を確実に伝えてくれる。この優美なトングの効果であろうか、1912年チェックを備えたパーフェクトのチェック機構は特別に滑らかで、大物を掛けたときの逆転音は、モーツァルトさえ羨むほどの流麗なメロディーを奏でてくれる。それ故、クラシック



1912年チェック

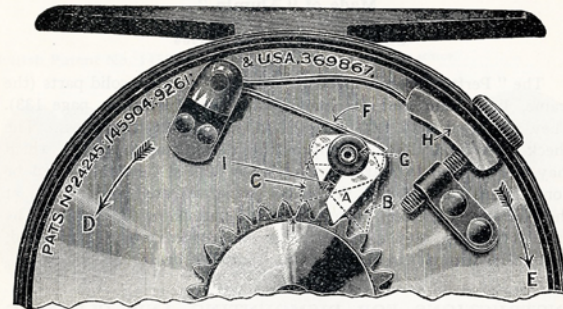
タックル愛好家の間では、1912年式パーフェクトは一目置かれる存在となっている。

それが1917年に入ると、大量生産時代にふさわしくよりシンプルな構造へと進化する。優美であったトングはシンプルなものに変更され、全体として簡素な機構となったのだ。このシングルチェック(single check)と呼ばれるスタイルはまもなく廃止となり、1922年にデュプリケイテッド・マークⅡ(Duplicated Mark II)と呼ばれるモデルが登場する。同モデルの内部機構は、1917年式チェック機構に予備の爪と板バネが追加されてダブルチェック(double check)と呼ばれる。これ以降、同チェック機構はパーフェクトのみならず、後継機であるセントジョージやユニニカといった他のモデルにも採用され、部品の汎用化が進められていく。



英国紳士とパーフェクトリール

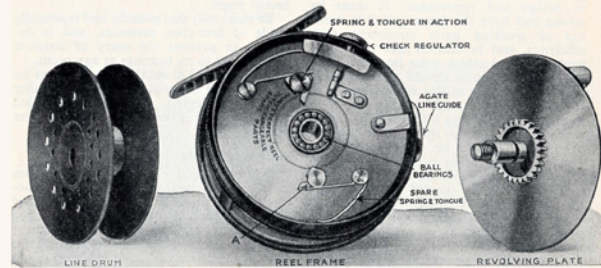
Hardy's "Compensating" Check



ハーディー社カタログ[1934]より

このデュプリケイテッド・マークⅡには、波状の畝(うね)がつけられた短めのリールフット(注:それ以前のパーフェクトのリールフットはかなり長く、現代のロッドには取り付け難い程度である)が導入され、ハンドルも象牙製からエボナイト製に変更されている。また、1917年頃から廃止されていたスプール脱落防止用の左締めネジは、当然、デュプリケイテッド・マークⅡにおいても省略されている。同モデルは1945年まで製造の続くロングセラーとなり、クラシック・パーフェクトといえは多くはこのモデルを指すほど広く世界中に普及することになる。

Hardy's 'Perfect' Fly Reels



デュプリケイテッド・マークⅡの内部構造[1954]

そして第二次世界大戦の終結後、ハーディー社は再びパーフェクトのモデルチェンジに挑む。リールフットは厚めでストレートな形状となり、ハンドルプレートの中央にはスプール軸を固定するための銀色のエンボス加工(embossed)が施されている。また、当初はダブルチェック機構を踏襲していたが、のちに一部のモデルではライトウェイト・シリーズで利用が進んだ左右切り替え式のチェック機構に変更された。中でも最大の変更

点は塗装方法で、それまでの黒鉛塗装は取扱いが危険で環境負荷も高かったため、現在主流となっているエナメル塗装へと切り替えられて、今日に至っている。

これほどまでに進化を遂げたフライリールが、大西洋の向こう側に住む同胞たちを魅了しないはずがなかった。アメリカ合衆国のフライフィッシャーもまた、パーフェクトリールを慈しみ愛用しながら、米国フライフィッシング文化を深めていった史実をここに明記しておきたい。

この国でもリールに悩むフライフィッシャーは多かった。リール内部に砂やゴミが入り易く、チェック機構の甘いものが多かったという。「米国ドライフライの父」として知られるセオドア・ゴードン (Theodore Gordon [1854-1915]) も1914年の連載記事の中で、「身近なリールにはろくなバネが装備されていない。いつも大事な場面で折れてしまう」と嘆いているほどだ。もし彼がパーフェクトリールを手に入れられるほど裕福であったなら、その悩みは解消されていたに違いない。事実、ニューヨークの高級店アバクロンビー&フィッチやデトロイトにあったポール・ヤング経営の釣具店でも、パーフェクトは最高級機種として取り扱われ、ショーケース内で特等席を占めていたのだ。



ハーディー工場リール製造工程の模様[1954]

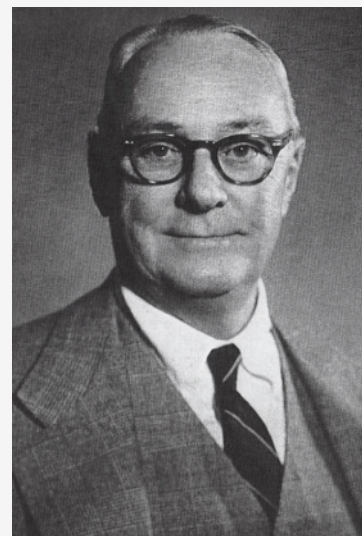


同上



同上

また当時、著名アングラーたちの間でもパーフェクトを愛用する者は多かった。有名な事例を幾つか挙げると、発明家として知られるエドワード・ヒューイト (Edward R. Hewitt [1866-1957]) は独自の設計によるフライリールを発明するほどの入れ込みようであったが、愛するネヴァーシングの流れで鱒を狙うには、黙ってパーフェクトを使っていた。また、アート・フリック (Arthur B. Flick [1904-85]) は、死の間際まで愛用していたギラムの9フィートに、必ずパーフェクト 2-7/8 インチを載せていたことが知られている。



ユージン・コネット



パーフェクトリールとエドワード・ヒューイト

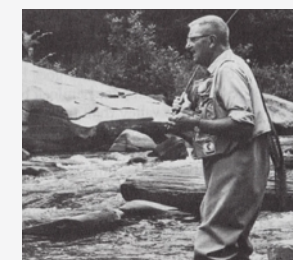
こうした有名人による告白の中から、ユージン・コネット (Eugene V. Connett III [1891-1969]) の著述内容を紹介してみよう。彼は野外スポーツ専門の出版社、デリーデイルプレス (Derrydale Press)

を設立して、数多くの釣りの名著を世に送り出したことで知られる。ヒューイトやラブランチらとも親しく交わり、戦間期における東海岸のフライフィッシング・シーンをリードした一人である。彼の著作「釣れますか」

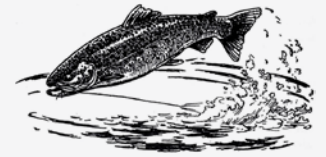
(ANY LUCK? [1935]) には、パーフェクトについて熱烈な賛辞を綴った一節が遺されているので、それを紹介してこのフライリールの歴史的銘機に関する解説を締めくくりにしたい。



A&F カタログ [1937]より



パーフェクトリールで釣るアート・フリック



『私は以前、リールの役割はたった二つしかないと書いた。「竿のバランスをとる役割」と「ラインを収納する役割」である。だが、その後いろんな経験をして、もうひとつの役割——つまり「12インチ以上の大物を掛けたときにやり取りする役割」があるのに気づいたのだ。確かに、幅が狭くて径の大きいスプールを備えたシングルアクションリールで、サイズと重量が適当なものであれば、どれでも竿のバランスぐらいはとれるし、ラインも収納できる。だが、良型の鱒を上手くないなそうと

するなら、調整可能なドラグシステムを搭載したリールを用いなければならない。ここに、一台の英国製リールがある。メノウで出来たラインガイドが付いたもので、値段は53 シリング6ドラクマぐらいだったと思うが、まさしく完璧なリールのように思われる。それが、ハーディー兄弟商会のパーフェクト・フライリールである。きわめて高い品質を誇るのだが、私はこれまでそんな高品質など不要だと信じ切っていたのだ——リールの歯車が噛んだり、スプールが外れて落水したりして、たくさんの獲

物を逃してしまうまでは、の話である。思うに、英国製の高級リールは決して無駄遣いなどではない。これらの銘機を使わずに釣りをすることなど、私には到底考えられないのである』

文責：N.N.



Perfect Duplicated Mk II とPayne 208と大物レインボー

ディーラー 一覧

| | | | | | | | | |
|-----|-------|------------------------|--------------|-----|------|--------------------|-------------------|--------------|
| 北海道 | 札幌市 | ドリーバーデン | 011-213-1235 | 東京都 | 中央区 | 釣道楽屋サバロ | 03-3201-2000 | |
| | 札幌市 | テムズ | 011-271-6070 | | 台東区 | サンスイ 上野店 | 03-5688-8661 | |
| | 札幌市 | WILD FISHING EQUIPMENT | 011-557-1892 | | 台東区 | つるや釣具店 | 03-3842-4071 | |
| | 札幌市 | CORSO SAPPORO | 011-590-0992 | | 荒川区 | フライショップ 沢 | 03-5604-5828 | |
| | 札幌市 | RIVER FREAK | 011-558-8919 | | 渋谷区 | サンスイ 渋谷店 Part I | 03-3400-3698 | |
| | 札幌市 | つり具センター 西岡店 | 011-853-3700 | | 豊島区 | サンスイ 池袋店 | 03-3980-7270 | |
| | 札幌市 | マイロッホ サッポロファクトリー店 | 011-590-4649 | | 豊島区 | ハーミット | 03-5843-3008 | |
| | 函館市 | ナカシマ | 0138-23-7637 | | 練馬区 | 上州屋 練馬光が丘店 | 03-3995-2855 | |
| | 旭川市 | つり具センター 旭川店 | 0166-29-0030 | | 武蔵野市 | 釣道具まるかつ | 0422-38-9607 | |
| | 旭川市 | フィッシングタックル みなと | 0166-51-2701 | | 武蔵野市 | ループ トゥループ | 0422-38-6380 | |
| | 旭川市 | グリッター | 0166-73-4466 | | 府中市 | リバーランド | 0423-69-5200 | |
| | 帯広市 | ツイードリバー | 0155-23-5778 | | 八王子市 | 上州屋 八王子店 | 0426-91-2001 | |
| | 音更町 | クレイジーフィッシャー | 0155-30-4636 | | 八王子市 | WILD-1 多摩ニュータウン店 | 0426-70-7550 | |
| | 釧路市 | ランカーズクシロ | 0154-55-2288 | | 町田市 | サンスイ 町田店 | 042-732-1271 | |
| | 弟子屈町 | GOOSE FACTOR | 015-482-5025 | | 青梅市 | 川よし釣具店 | 0428-22-3311 | |
| | 名寄市 | ワイルドドライブ | 01654-8-9696 | | 神奈川県 | 横浜市 | フライフィッシングショップ なごみ | 045-548-5447 |
| | 北見市 | バックウォーター | 0157-57-3530 | | 横浜市 | サンスイ 横浜店 | 045-316-5501 | |
| | 上湧別町 | クラブエス | 01586-2-3317 | | 横浜市 | BLUE DUN | 045-264-4264 | |
| 岩手県 | 紫波町 | Little Bell | 019-613-5655 | | 横浜市 | アウトドアワールド つきみ野店 | 045-923-1669 | |
| 宮城県 | 仙台市 | 杜の家 フルック | 022-797-8385 | | 相模原市 | ハーツ | 0427-78-7290 | |
| | 仙台市 | プロショップ オノ 仙台店 | 022-291-6477 | | 新潟県 | 長岡市 | パーマーク | 0258-37-1200 |
| | 仙台市 | アウトドアショップ ストーク | 022-252-9588 | | 新潟市 | WEST 新潟店 | 025-241-8800 | |
| 秋田県 | 秋田市 | D.LOOP | 018-831-3008 | | 山梨県 | 忍野村 | リバーズエッジ | 0555-84-4833 |
| 山形県 | 山形市 | クレーク | 0236-41-4137 | | 長野県 | 小諸市 | ナチュラル | 0267-41-6368 |
| 福島県 | 郡山市 | WILD-1 郡山店 | 0249-31-5180 | | | 佐久市 | マウンテンロックリバー | 0267-67-2170 |
| 茨城県 | 水戸市 | WILD-1 水戸店 | 029-248-5571 | | | 伊那市 | アングラースパラダイス | 0265-74-1811 |
| 栃木県 | 宇都宮市 | キャンベル 宇都宮店 | 028-635-8944 | | 静岡県 | 富士市 | ザ・トラウトバム | 0545-88-9335 |
| | 宇都宮市 | WILD-1 宇都宮西川田店 | 028-680-7696 | | 静岡市 | ケンモチ | 0543-52-3622 | |
| | 宇都宮市 | WILD-1 宇都宮駅東店 | 028-633-1182 | | 浜松市 | 上州屋 浜松店 | 053-473-1130 | |
| | 日光市 | サーフェイスアウトフィッターズ | 0288-22-5629 | | 岡崎市 | WORLD WIDE ANGLERS | 0564-83-8461 | |
| | 鹿沼市 | 上州屋 鹿沼店 | 0289-63-5171 | | 名古屋 | ラストホープ | 052-502-4424 | |
| | 佐野市 | アカサカ釣具 株式会社 | 0283-22-0298 | | 名古屋 | ルアー・フライショップ 上飯田 | 052-912-6791 | |
| | 西那須野町 | WILD-1 西那須野店 | 0287-37-8811 | | 名古屋 | FLY SHOP 加藤毛ばり店 | 052-938-5585 | |
| 群馬県 | 高崎市 | サンビーム 高崎店 | 027-364-3332 | | 名古屋 | WILD-1 名古屋守山店 | 052-777-3120 | |
| | 高崎市 | WILD-1 高崎店 | 0273-63-7511 | | 滋賀県 | 栗東町 | 上州屋 滋賀栗東店 | 077-554-0915 |
| | 伊勢崎市 | WILD-1 伊勢崎店 | 0270-20-7171 | | 京都府 | 京都市 | GREEN & SUN | 075-812-2062 |
| | 伊勢崎市 | つり倶楽部 | 0270-21-3533 | | 京都市 | WILD-1 京都宝ヶ池店 | 075-781-2555 | |
| | 前橋市 | WILD-1 前橋みなみモール店 | 027-212-3678 | | 大阪府 | 大阪市 | ビギナーズマム | 06-6362-6880 |
| 埼玉県 | 草加市 | プロショップ ロックス | 048-934-5582 | | 大阪市 | ドラッグフリー大阪 | 06-6377-8882 | |
| | 越谷市 | WILD-1 越谷レイクタウン店 | 0489-90-1155 | | 兵庫県 | 神戸市 | フライショップ ユーズリバー | 078-327-0558 |
| | 春日部市 | キャンベル 春日部店 | 048-763-2500 | | 奈良県 | 橿原市 | Pureland | 0744-21-2306 |
| | 羽生市 | うらしま堂 渡辺釣具店 | 048-565-0444 | | 和歌山県 | 田辺市 | フライショップ ベスカドール | 0739-24-7190 |
| | 新座市 | レインボー | 048-479-1982 | | 広島県 | 広島市 | ささきつりぐ | 082-261-4331 |
| | 大井町 | WILD-1 ふじみ野店 | 0492-69-6863 | | 徳島県 | 松茂町 | いはら釣具本店 | 088-699-5999 |
| | 入間市 | WILD-1 入間店 | 0429-60-3131 | | 愛媛県 | 砥部町 | リトル ウイング | 089-962-7616 |
| | 熊谷市 | リバーサイド | 048-525-2554 | | 高知県 | 高知市 | 西洋毛釣具本舗 龍馬 | 088-874-0728 |
| | 本庄市 | 鱒夢 | 0495-71-7074 | | 福岡県 | 春日市 | CASKET | 092-581-1187 |
| | 皆野町 | フライショップ パレット | 0494-62-3547 | | 大分県 | 大分市 | げんごろう | 092-922-9758 |
| 千葉県 | 印西市 | WILD-1 印西ビッグホップ店 | 0476-40-6112 | | 熊本県 | 熊本市 | Pot-Belly | 096-371-1800 |
| | 習志野市 | WILD-1 幕張店 | 047-451-0080 | | 熊本市 | 熊本市 | サンディフロッグ | 096-273-6889 |
| | | | | | 宮崎県 | 宮崎市 | PORTAL | 0985-74-7658 |

HARDY
ALNWICK | ENGLAND

C&F DESIGN

www.c-and-f.co.jp